



データに基づく科学的理解が重要

幼児教育学科 教授 川島 良雄

現在、担当科目である「子ども家庭福祉」において、児童虐待についての授業が終わったところである。この授業を準備しながら感じていたことがある。それは、児童虐待についての「かわいそうな子」「酷い親」といった感覚的・情緒的な反応の多さである。この感覚的・情緒的な反応は、間違っているわけでもなければ、悪いわけでもない。だが、そこに留まってしまうと児童虐待の実像が見えてこなくなってしまう。科学的で客観的な理解の前提条件としては、客観的なデータつまり調査結果や統計データ等の分析から始めなければならない。

児童相談所における2020(R2)年における児童虐待相談の対応件数は、身体的虐待 50,035件 24.4%、保護の怠慢(ネグレクト) 31,430件 15.3%、性的虐待 2,245件 約1.1%、心理的虐待 12,1334件 59.2%、相談総件数 205,044件であった。文字通り、右肩上がりに増え続けてきたが、心理的虐待が虐待相談の総件数の増加を牽引してきたといえる。この心理的虐待には、「虐待防止法」の規定により「児童に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応」の他、「児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力」いわゆる面前DVが含まれる。現在の統計においては、心理的虐待の再掲として「暴力の目撃等によるもの」が開示されている。その件数は、71,006件であり、心理的虐待の約58.5%となり、虐待相談総件数の34.6%に上る。つまり、虐待に占めるDV環境の家庭の増加が大問題であると理解することが必要な状況である。(統計データの出典：「令和2年度福祉行政報告例」2021.11.25 厚生労働省)

第2の問題は、虐待相談の対応別件数についてである。2020(R2)年の児童虐待への対応別件数は、施設入所 3,681件 1.8%、里親等委託 656件 0.3%、これに対し面接指導は176,636件 85.6%、その他が25,328件 12.3%であった。児童相談所における対応の大部分は面接指導で終結しており、施設入所、里親等委託等の親子分離をせざるを得ない重篤なケースの割合は極めて低い現状が見て取れる。これは、子育て支援の重要性の表れであるといえることができる。(統計データの出典：「令和2年度福祉行政報告例」2021.11.25 厚生労働省)

第3の問題は、虐待死についてである。近年においては、心中を除く虐待死に至った児童数の虐待総件数に占める死亡事案の割合は極めて低いが、ここ数年年間40人から50人後半で推移している。このうち、3歳以下の児童が7～8割を占め、0歳児が約半数を占めている状況である。0歳児の虐待死を減らしていくことが、至上命令であると言わざるを得ないのが現状である。(出典：「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第17次報告)」令和3年8月 社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会)

このことが知られていないことが問題であるといえる。しっかりとデータを把握し分析をすることが、事態の正しい理解に直結するとの自覚こそが重要である。

Ueda Women's Junior College Library News Misuzu

目次

データに基づく科学的理解が重要
心に残る一冊
娘に想うこと
本と私の関わり
本の世界の楽しさと学び
本がつくる思い出
本からの学び
「読書の質」について
上田女子短期大学教員が学生にすすめる本
本学教員の新刊著作
図書館ニュース

CONTENTS

幼児教育学科 教授	川島 良雄	1
総合文化学科 専任講師	小山 泉	2
准教授	柿本 悠	3
総合文化学科 助教	岡村 綾華	4
幼児教育学科 1年	太田 葵	5
幼児教育学科 2年	宮下 絢野	5
総合文化学科 1年	藤澤 愛子	6
総合文化学科 2年	小林 美斐	6
総合文化学科 教授	花岡 勉	7
幼児教育学科 准教授	千葉 直紀	7
		7
		8

心に残る一冊

総合文化学科 専任講師 小山 泉

英語を学ぶ過程で、英米文学に親しむ機会が多くありました。青年期において、人生、社会、人間への開眼が文学によってなされるとは、よく言われていることですが、私自身も少しでも多くの作家やその作品に触れてみたいとよく読んだ時期がありました。その中に、19世紀イギリス文学の女性作家、ジェイン・オースティン(Jane Austen)がいます。世界的にも評価の高い作家です。代表作の『高慢と偏見』(Pride and Prejudice、1813年)は、イギリスBBCや米国ハリウッドでも、幾度となくドラマ化、映画化されています。この小説の魅力は？と問われましたら、構成の面白さと英語表現の豊かさをあげたいと思います。

作品の舞台は18世紀イギリスの田舎のある家庭。その5人姉妹と母親の間で繰り広げられる結婚相手についての誤解と偏見により引き起こされる悲喜こもごものエピソードが、読み手の心を捉えて、その話に引き込むのです。

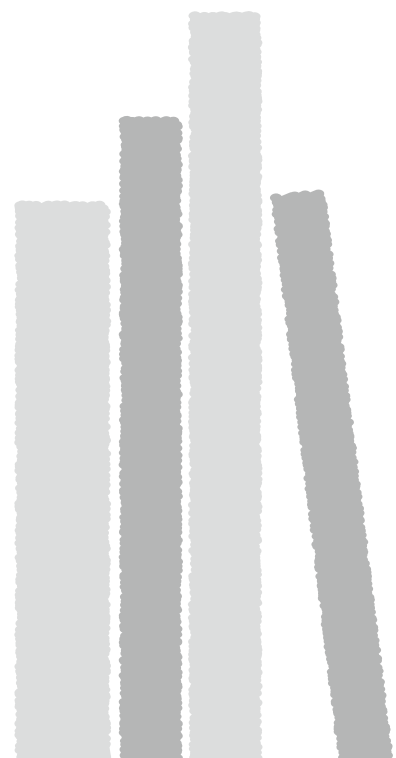
また次々に登場する人物の設定や当時の時代背景を踏まえてごく自然なかたちで展開する誇りと偏見あふれる会話の巧妙さにも感心させられます。それらが、この作品の面白さが際立つ所以とも思われます。さらに、登場人物が、それぞれ個性豊かで、中心となるベネット一家の家族一人ひとりの個性描写は、読み手に鮮明な人物イメージを描かせ、楽しませてくれます。作者の精密でユニークな表現力も光ります。特に5人姉妹の描写の中で、主人公である次女・エリザベスをはじめ、一人ひとりのその細やかな表情・所作まで見えるような表現の豊かさは、物語の展開をより鮮明にし、ページをめくる読者の心を躍らせます。その上に、話のやり取りの中のユーモアとアイロニー(皮肉)は、表現の厚みを増すと共に、小説全体の持つ魅力を増幅させているように思います。

女性作家が、女性の心理を繊細に描いたこの作品が、出版されて200年以上経った今でも、時を超えて多く

の読者に感動を与え、評価され続けていることは、この作者と作品の魅力を示している理由だと思います。機会をみて、またこの作品のキーワードであり、これを持ち合わせていなければイギリス人ではないと言われる「ユーモア」のセンスを、更に深く意識して読んでみたいと思います。

折しも、史上三人目の女性首相を誕生させたイギリスと言う国を思い(9月末現在)、文学のみならず、イギリスの歴史や国民性、文化・風土から私たちが学ぶことはたくさんあると感じます。

ちなみに、私の好きなアメリカ人作家の一人は、オー・ヘンリー(O. Henry)です。『最後の一片』や『賢者の贈り物』などで知られるように、短い物語の中に読者をあっと言わせる哀歓に満ちた「オチ」を密かに用意している作者の巧妙さに驚かされつつ、また次の作品を読んでみたいと言う気持ちにさせられるのです。



娘に想うこと

准教授 柿本 悠

5歳の娘がいる。テレビを観ることは滅多に無いのだが、幼稚園でしっかり情報を仕入れてくる。『アンパンマン』の登場人物たちを良く知っているし、お風呂あがりには『クレヨンしんちゃん』を真似てお尻を振っている。面白いのは、限られた語彙の中で彼女なりに覚えているものもあるということ。具体的には、『すみっこぐらし』を「すみっこブラシ」と呼ぶし、『鬼滅の刃』は「ひみつのまえば」となる。知っている単語を結びつけ得意げに話す、その不完全さが親としてはたまらなく愛おしい。

一方、生まれてすぐから親しんできた数々の絵本に関する記憶は、我が子ながら凄い。「本が好きな子になって欲しい」これは生まれてくる娘に妻と私が願った唯一の想い。娘の祖父母には、誕生日のお祝いに絵本の定期便を毎年お願いし、今でも長崎の会社から毎月2冊の絵本が届く。加えて、本屋で買ったり、人から頂いたり。数えてみると、彼女の本棚には252冊の絵本がある(2022年8月末日現在)。これらの中から毎晩寝る前に必ず3冊自分で選び、妻か私が読み聞かせるのだが、背表紙だけで目当ての絵本を見つけ出す。

背表紙だけでなく、絵本の内容もことごとく覚えていて、いつからか“読み聞かせごっこ”が始まった。幼稚園スタッフを真似て椅子に座り、目の前の架空の聞き手に向けて絵本を開いている。器用にページを繰り、絵本の横からひょいっと顔をのぞかせながら、時々「見えますかー？」などと言っている。そして、文字はまだほとんど読めないはずなのに、見事にお話を読み聞かせている。

“絵本を読む”と言う行為が、様々な広がりを見せているのも面白い。幼児の発達と言う観点でどのような段階にあるのか、その説明は本学の専門家にお任せするが、一例として“絵だけで読む”と言う遊びが最近始まった。もともとの物語は無視して、絵だけを見ながら物語を創造する。親に求められるとなかなか難しく困るのだが、本人が創作することもあり、その展開や突拍子もない飛躍に感心することも多い。

親バカにもう少しお付き合い頂きたい。“絵だけで読む”もその一例だが、娘は自分の中から湧き出る考えや想いを“表現すること”に全身全霊をかけて楽しんでいる。4歳になって少し経ったある日の夕方、食卓でビールを飲む私の横で、娘は不思議な恰好で床に寝転んでいた(写真参照)。「何してるの?」と聞いたところ、娘の返答が秀逸だった。

「『と』になっているの」

ひらがなに興味を持ち、自分の名前を鏡文字交じりで書き始めた頃で、自分の名前の中にある大好きな『と』を、文字通り全身で表現していた。ひょっとすると、本人には“表現している”感覚は無く、“これをしてい!”と自ずと湧き出たものを発出・発散していただけかもしれない。

さて、振り返って本学の学びについて。昨年10月に実務家教員として着任し、須永特別招聘教授と岡村助教と共に“デザインの学び”に取り組んできた。まだまだ始まったばかりで、紆余曲折があり試行錯誤が続く日々だ。ただ、常々思うのは、学生一人一人が(正しい・正しくないはさておき)自分が本当に興味あること、楽しいと思うことに素直にとことん向き合っていて欲しいということ。世の中そんなに単純ではないけれど、自分の中に“これ!”と思えるものがあると、困難すら楽しめるというか、人生が豊かになるのではないかと思う。

娘には、いつまでも我が娘らしくあって欲しいし、「君は君で良いんだよ」と伝え続けたい。そして、それは本学で学ぶ学生のみならずにも伝えたいことでもある。



『と』になる娘(本人は至って真剣である)

本と私の関わり

総合文化学科 助教 岡村 綾華

今までの人生で「本の虫」と呼ばれる類には属してこなかった。何なら、文字を読み始めるとトイレに行きたくなくなってしまいう始末…。そんな人生を送ってきたが、それでも「本」が私の人格や行く先をつくる要素となってきたと振り返る。

※ここでいう「本」は、複数の紙が一つに綴じられたものと捉える。

1. 小学：図書室に入り浸る

自分でも驚くぐらいに図書室に入り浸っていた時代がある。

小学5年生、歴史漫画が流行った。自分も何となく手に取り読んでみると止まらない。「ナイチンゲール、すごいな！！」この好奇心を原動力に、10分ほどの休み時間でも授業が終わるとサッと図書室に行っただけは続きを読み漁っていた。それは、「私」とそこに描かれている「誰か」の人生に「本」という媒体を通して出会う、そしてそれが楽しいと思う初めての経験であったと言える。

しかし、全巻読み終えてしまったところから熱が冷め、図書室には行かなくなってしまったのだった…。

2. 中(高)学：「暇！！！」

好奇心のままに過ごしていた少年期だが、中学時代に体を崩し絶対安静を求められた。当時運動部に所属していたが筋トレをしない日はなく(今では考えられない)、動きたい欲で悶々としていた。“絶対安静”とはとてつもなく暇であり「暇より地獄はない」と悟った。その中でやれることを見つける。それが“読書”と“勉強”だった(これも今では考えられない)。そこでは色々な本に出会った。小説やスポーツ書、体の仕組み、環境、宇宙、哲学…どれも知識としては浅いが何となく過ごしてきた日常の世界を、違った視点からみる知識を獲得するのが楽しかった。「体ってすご！自然ってすご！宇宙ってすげーぞ！！(孫〇空のように読む)」

果てしなく膨大で複雑なこの世界の関係・連なりのある側面を知り、その連関を垣間見る、知識を得ることの楽しさを様々な本を読むという経験から学んだ。

しかし体が回復するとともにこの習慣は薄れ、しまいにはなぜか文字を見るだけでトイレに行きたくなくなってしまいう拒絶反応を示すまでになってしまった…。

3. 大学：「本」という名の建築

大学でデザインを学ぶ中、また本に出会った。それは、私が今まで出会ってきた本の概念とは違った視点からみる本であった。

ある課題が出された。デザインリサーチとして撮影した写真を1冊の本にまとめ、つくること。読むのではなく“つくる”ことを求められた。どのようなコンセプトの本で、それを支える章立てやページ数(構造)、レイアウト(配置)、展開方法(読まれ方・使われ方)、素材やフォント(表現要素)。本はページをめくり進めるという時間軸を内包した一つの建築と捉えられた。実際、本は建築だと言われたりもする。そう見てみると面白い。内容から佇まいまで、本はある種の人格や個性をまとった建築だ。この経験から私の中で本とは、作者を「表現する構造物(建築)」であるという認識に進化したのだった。

4. 今

「本」の中に記述されている著者の視点や知識に出会うことの面白さ、そして「本」という表現物そのものの面白さに出会った。思い返せば、その体験が「今のわたし」を形成する重要な要素になっている。

現在、また重い腰を上げ、机に積まれた本に手を伸ばし少しずつ読み始めているが、私の探究と問いについてすでに先人たちが人生をかけ探究し培ってきた知恵(著者)に「本」という媒体を通し、時を越えて出会っている感動を最近ひしと感じる。「本」というその人の家にお邪魔し話を聞いている感覚である(しばしば何を言っているのかわからないことはあるが…)。

次にこの出会いから何を学ぶのか、どこへいざなわれるのか。楽しみである。

本の世界の楽しさと学び

幼児教育学科1年 太田 葵

私は、本を読むことが好きです。母から「保育園にいた頃は保育園にある絵本をたくさん読んでいたんだよ。」と教えてもらい、私が本を好きなのは小さい頃からなんだな、と思いました。

しかし、私は学校生活の中でもっと本が好きになったと思います。私は小学生の頃、人見知りで友達がありませんでした。そのこともあり、休み時間は図書館に行って借りた本をひたすら読んでいました。本を読んでいるときはその物語に自分も入っているかのようにのめりこみ、集中すると一日に3・4冊読んでしまうほどでした。このように自分が様々な本の世界に入る時間が楽しくて、辛かった時や疲れた時のリフレッシュにもなったので、私にとって本を読む時間は大切な時間でした。中学校でも高校でも、休み時間や空いた時間に色々な本を読んでいた。

高校生の時は、2年生で図書委員会副委員長、3年生で図書委員長と図書館で仕事をするようになりました。主な仕事は当番活動ですが、図書館報づくりや図書館だよりで好きな本のことや様々なジャンルの本を

まとめることで書く力がついたり、様々な知識を取り入れられたりして、私は本を読むことや図書館報を作ることから様々な学びを得ました。そして、店頭選択では「学校の近くの本屋さんに行って学校に入れる本を買う」という経験をさせてもらいました。今まであまり本屋さんに行ってもどうせ買えないしな、と思ってじっくり見ていなかったけれど、店頭選択で隅々まで見ると、自分の好きなジャンルの本がたくさんあって、まだまだ読んでみたいと思うようになり、今では本屋さんに行ったら自分が好きな作家さんや本探しをしています。

このように書く力がつけられたり、知識を取り入れられたり、本を読むことで沢山の学びがありました。何より自分がその本にのめりこむほど本を読むことは楽しいので、本を読んでほしいと思いました。

しかし私が図書委員になって本を借りる人が少ないことに気づきました。本は種類が豊富でその人に合う本がたくさんあるので、ぜひ一度本を探すことから始めて、本を読むことを楽しんでほしいなと思います。

本がつくる思い出

幼児教育学科2年 宮下 絢野

私は小さな頃から周りに本がある環境で生活してきました。子どもの頃は沢山の絵本を読み、恋愛をした時には恋愛小説を読みあさり、受験シーズンには息抜きに漫画を読んだり、大学生になると父の影響で心理学の本を貸してもらったり…、様々な場面で本は私を支えてくれました。

また、大学生になると幼児教育学科ということもあり、絵本に触れる機会が多くなりました。実習で子どもたちに読む本を探していると、小さな頃に好きだった絵本に再び出会うことが出来たり、寝れないときに両親が読んでくれた絵本や保育園の劇のために先生が毎日読み聞かせしてくれた絵本を思い出したりなど、絵本を開くたび絵本の内容と共に思い出がよみがえってきました。

私は特に『どんぐりむらのぼうしやさん』という絵本が好きでした。発売と同時に出会い、表紙に一目惚れして買ってもらったのを覚えています。ぼうしのデザインを描いて出版社に送り、ぬいぐるみが届いたことも記憶にあります。しかし、年齢を重ねるにつれ、絵

本を読む機会が減り、大好きだった絵本も家の本棚の片隅にひっそりと置いてあるだけの状態が何年も続きました。大学生になり、子どもたちにどの絵本を読み聞かせしようかと悩んでいる時に再び出会うことが出来ました。子どもたちに実際に読み聞かせする機会もあり、小さい頃の自分と重ねながら「私と一緒にこの場面が好きなんだろうな」「こういったリアクションもあるのか」と昔の思い出と共に新しい思い出を子どもたちにつくってもらえることが出来ました。

小さい時に見た印象的なことは大きくなって覚えているものです。新しい本に出会うことも大切ですが、ふとした時に昔読んでいた本を読み返してみるといったことも面白いと改めて思いました。私は来年から保育者になりますが、子どもたちに本に触れる環境をつくっていく中で、子どもたちが大好きな絵本に出会い、そして大きくなり、その絵本に再び出会った時に、絵本の内容と共に楽しかった思い出が沢山出て来るような毎日と一緒に過ごしていきたいです。

●●●●●●●●●● 本からの学び

総合文化学科1年 藤澤 愛子

私は中学生のときに『キャプテン』という本に出会いました。その本は当時、図書館の新刊コーナーに置いてあり、表紙のイラストが繊細でとても綺麗でした。私はその表紙に惹かれ、どのような本なのかも全く知らないまま勢いで本を借りてしまいました。しかしそのことが、自分にとって本から学びを得られる良いきっかけになりました。

その本は、野球部のキャプテンである主人公が仲間と協力して、大会優勝を目指す物語でした。優勝を目指していくなかで、価値観や考え方の違いによってチーム内でトラブルが起きたり、主人公自身が他人と自分を比べてしまいネガティブな気持ちになったりしてしまう場面がありました。しかし、主人公はそんななか諦めずに相手の考えを受け留め、その上で自分の考えをしっかりと相手に伝える努力をしていました。また、他人と自分を比べることをやめて自分を見つめ直し、前向きな気持ちで練習に取り組む姿が書かれていました。

そのような主人公の姿から、価値観や考え方の違い

を受け留めることの大切さを学びました。相手の考え方を受け留めることは、色々な角度から自分の考えを見直すことだけでなく、良い人間関係を築くことにもつながると思います。また、他人と自分を比べず、自分らしく生きていくことが大事だと実感しました。人にはそれぞれ得意不得意があり、皆が同じことをできるわけではありません。ある物事に関して相手ができて自分はできないから駄目だと思うのではなく、自分だったらどうしたいのか、どこまでできるようになりたいのかを考えることで、自分を成長させることができると思います。

本は娯楽として読んで楽しむだけでなく、普段見落としていたことに気づかせてくれたり、自分の考え方に良い変化を与えてくれたりするものだと思います。また、本を読むことを通して感じたことや思ったことは心に残り、ふとした瞬間に思い出して温かい気持ちになったり、自分の考え方や行動に気を配るきっかけになったりします。これからもさまざまな本を読み、そこで学んだことを大切にしていきたいです。

●●●●●●●●●● 「読書の質」について

総合文化学科2年 小林 美斐

皆さんにとって「読書」とはどのようなものですか。私が本を読むようになったのは小学生の時でした。小学校の図書室が所蔵していた児童書を手に取ったことがきっかけでした。それから、「読書」が私の趣味になりました。5週間に3回ほど図書室に通い、休み時間も本を読んで過ごすようになりました。中学・高校で図書委員になり、司書の方と接するなかで、自分も本と子どもたちを繋ぐ仕事がしたいと司書を志すようになりました。

短大に入り、司書課程を学ぶなかで、「読書の質」について考えることができました。全国学校図書館協会による「学校読書調査」において、1989年から2019年までで小中学生の平均読書冊数が増加していたそうです。また、どの校種でも不読者数が減少したといった結果も見られたそうです。これらの結果は、一見好ましいように思えますが、「読書の質」という点から見ると違った見方ができます。全国学校図書館協会が調査した、中学生の「5月1ヶ月に読んだ本」の1968年の上位15作品を見ると、『坊ちゃん』や『走れメロス』

など、名作・古典という評価が確立しているのに対して、2017年では、『君の臍臓を食べたい』や『この素晴らしい世界に祝福を！』などのライトノベルが大半だったそうです。つまり、現在の若者の不読率が低いのは、読みやすいライトな作品を読んでいるからではないか、と考察することができるのです。

私自身、小学生の頃から児童書やライトノベルなどを読んできました。質の良い読書をしてきたとは言えません。これまでの読書の仕方を振り返り、「読書の質」について考えることは、自分の読書の姿勢を見つめ直す機会となりました。これからは、様々なジャンルに関心を持ち、質の良い読書を心掛けていきたいと思えます。皆さんも、これまでの読書の仕方を振り返ってみませんか。きっと、新しい発見があるはずです。

上田女子短期大学教員が学生にすすめる本

Vol.
8

総合文化学科 教授 花岡 勉

My Recommended Books



①私の読書の中から

『月まで三キロ』

伊与原新著 新潮社 2021

913.6

I97

私には苦手な自然科学分野(天文、気象、化石、火山)であるが、軽妙なタッチの短編集で知的好奇心を駆り立てる。悩み多き若かりし自分と重ね合わせながら一気読みさせられた。

②これは読んでおこう

『日本語教室』

井上ひさし著 新潮書 2011

810.4

I57

日常当たり前私たちが読み書き、会話している日本語についてこれほどわかりやすく、楽しく納得させてくれる日本語関連の本は少ないのではないか。言語としての日本語の奥深い魅力に溢れた内容である。

※人気TV人形劇「ひょっこりひょうたん島」の原作者。

③これは読んでおこう

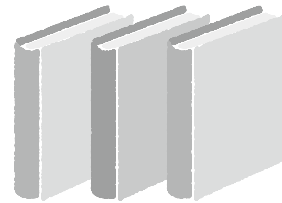
『壊れる日本人』

柳田邦男著 新潮社 2005

304

Y 53

スマホによって社会生活の利便性を大いに享受しているみなさんの多くは、この本が発行された頃に生まれている。作者は「ケータイ・ネット依存症への告別」を語っているが、日本人の何が壊れてきたのか多面的に検証してほしい。



幼児教育学科 准教授 千葉 直紀

My Recommended Books



①私の読書の中から

『ごんごんの保育笑説

みんな子どもが教えてくれた』

桜井ひろ子[著] ひとなる書房 2012

376.1

Sa 47

ごんごんこと桜井ひろ子氏は私が昔働いていた保育園(法人)の大先輩です。現在の“子ども主体”の保育を何十年前から実践していた人物です。子どもより子ども、誰よりも人間臭い。こんな保育者を目指したいものです。

②これは読んでおこう

『未来のだるまちゃんへ』

かこさとし著 文藝春秋 2014

726.5

Ka 27

絵本『だるまちゃん とてんぐちゃん』福音館書店(1967)の作者でもある、かこさとし氏は、彼が「子どもたちが先生だった」というように、色々な人から学んでいる姿勢に学ばされます。保育者として人間としてどうあれば良いのかということを考えさせられる1冊です。

③これは読んでおこう

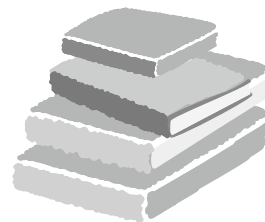
『共感 一育ち合う保育のなかでー』

佐伯胖編 ミネルヴァ書房 2007

376.11

Ky 4

私が保育者から研究者になる時に、出会った佐伯胖氏の著書。保育というつかみどころのない営みを高尚な営みであることとして理論的に科学的に分析を加えている一冊です。その中に出てくる「発達のドーナッツ論」は保育にとどまらず人間が生きて学んでいくことのプロセスを明らかにしています。



2022年 本学教員の新刊著作

(今年発行の単独著書・共著書・分担執筆書)

長田真紀 先生 『長野の子ども白書』

長野の子ども白書編集委員会 2022年6月発行(分担執筆)

P370.5

N 16

2022



隣は何を読む人ぞろ (ヨムゾー)

最新号
テーマは
“ねこ本”

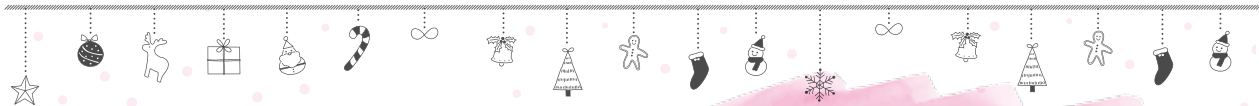
県内の8短大（飯田女子短大、上田女子短大、佐久大学・信州短大、信州豊南短大、清泉女学院大学・短大、長野女子短大、松本大学・松商短大、松本短大）の図書館が発行するリーフレットです。年に4回の発行で各大学の学生、教職員、司書が、毎号テーマに沿ったオススメ本を紹介しています。秋には1年間に紹介された本の中から特に読んでみたいと思った1冊に投票する「ヨムゾー大賞」を行っています。

紹介された本は図書館で展示しています。ヨムゾーのブックログやSNSもありますので、チェックしてください♪



「ヨムゾーでオススメ本を紹介してみたい！」という方を随時募集しています。

興味のある方はお気軽に
図書館職員に
お声がけください！



クリスマス 特別企画 雑誌の付録抽選会

図書館で購読している雑誌のさまざまな付録を、学生の皆さんに抽選でプレゼントします。かわいい使えるアイテムがたくさん！ぜひご応募ください★

- 場 所：図書館2階 カウンター横
 - 申込受付日：12月12日(月)～21日(水)
 - 当選発表日：12月23日(金)
- (図書館掲示板にて発表しますので応募した方は必ず確認してください)



みすず

第49号

上田女子短期大学附属図書館報
2022.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館・紀要委員会
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel：0268-38-6019 Fax：0268-38-6019
E-mail：lib@uedawjc.ac.jp

編集後記

a postscript by the editor

「この一冊に、ありがとう」 2022年 全国読書週間標語

十年前にスタートした「世界幸福度ランキング」で日本は昨年度56位、本年度54位と先進国では最低レベルでした。この幸福度を測る指標としては、国民1人当たりのGDP(国内総生産)や「健康寿命」の客観的要因だけでなく、世論調査によっても「自分の幸福度」を0～10段階で評価しています。

その中でも心の豊かさを数値で測ることは難しいことですが、本は単に文字や絵写真を印刷したモノや情報の提供ではなく、私たちのココロに響き、人生の様々な問いかけや知恵を与えてくれます。

素敵な本との出会いによって、感謝する心の豊かさを実感したいものですね。

附属図書館長 花岡 勉